

〔共同研究：泉州の歴史と文化〕

研究ノート

1995年度末・泉州おぼえがき

松 浦 玲*

前 説

95年度末、1996年の3月26日から4月1日にかけて、当プロジェクトでは泉州地域の調査を行なった。「調査」と言うと物々しいが実際は泉州に不案内なものが多いメンバーに土地勘をつけて、今後の研究の基礎条件を築いて置こうというのが狙いであって、見て歩いた、或は見ながら「走った」というのが正直なところである。しかし、それなりの成果は得た。以下は、その「調査結果」についての主観的レポートである。何年か後に、研究成果が蓄積され水準が高まって、95年度末には泉州プロジェクトのチーフがこの程度のことを考えていたのだよと嘲笑の対象となれば、以て瞑すべしだという気持ちで書き綴る。

泉州堺

桃山学院大学の旧キャンパスは、堺だけれども河内であった。この大学に採用されたとき、いちばん気になったのはそれだった。忠臣蔵九段目、十段目などから堺は泉州だと思っていたのに、登美丘キャンパスを取巻く環境は、どう見ても河内である。教員の何人かに疑問を呈してみたが、とりあってくれなかった。自分で調べて、旧南河内郡から堺市に合併された地域だということが解ったけれども、披露しても関心を示してもらえなかった。縁がない話なのである。あとで学内にも有縁の人が居ることが分かったけれども、なかなか巡りあわなかった。

総合講座「泉州の今昔」は、移転の前の年、1994年度から始めた。私が密かに力を入れたのは、堺市から和泉市への移転だけれども、泉州

の中の移動ではなくて河内国から和泉国への国替だという点であった。西口忠講師が、キャンパス移転の歴史を担当して、遺憾なく念入りに話して下さった。また灰掛薫講師が須恵器を製造した釜趾（燃料の木を求めて移動する）が河内・和泉国境の山から和泉国内の山へと連なっており、桃山学院大学の移転はその線上を動くのだという話をして下さって興味深かった。灰掛講師のお話に強引に引掛けて言えば、桃山学院大学の国替のコースは古来からの街道を使わず、国境の山々を突っ切ったのである。

河内から和泉へ

突っ切る位置は違いますが既に泉北高速鉄道がそれをやっていた。あの鉄道は、河内の中百舌鳥から元来は街道など無かったところを強引に突っ切って和泉の深井へ入り泉ヶ丘へ繋ぐ。泉北高速の泉ヶ丘駅から旧キャンパスへタクシーを利用した人は、和泉から河内に出て和泉に戻り、最後に河内の登美丘へと、朝の短い時間のうちに何度も違う国を出たり入ったりしていたわけだ。

これに対し、南海高野線は和泉の堺東を出たあとはずっと河内を走り、紀見峠トンネルを潜って紀州に入る。南海の北野田や狭山で降りて旧キャンパスまで歩くと、その一日は完全に河内国内で終始した。

なお南海とJRがクロスする三国ヶ丘駅だが、これは完全に河内の中である。どうしてこんな紛らわしい駅名がついているのか不審である。本当の三国ヶ丘すなわち拝津・和泉・河内の三国の境は、元来は方違神社である。元来はというのは、大和川改修で摂津・和泉の境の線が北へ動いたため三国の境のポイントも連動して微

*本学文学部

妙になっているからだが、いずれにしてもそれは北に移動させるしかないのであって、三国ヶ丘駅の位置のように東南に移動することはありえない。これについては最後にもういちど述べる。いまは大学の移転ルートが河内から和泉へと山を突っ切ったのだというところから転じて、以下はそうではない古来の街道の話に移す。

街道二本

和泉国には、海沿いにつまり東北から西南にかけて大きな街道が二本あった。紀州街道と熊野街道（小栗街道）である。山寄りにゴチャゴチャと何かあるという感じなのだが、これはまだ私にはうまく整理できていない。

紀州街道と熊野街道の二本は、御当地の方々にとって自明であるだけでなく、他所者の私にも良く分かる。紀州街道沿いに南海本線、熊野街道沿いに国鉄つまりJRという説明を受けるとますます良く分かる。

だが、他国者の私から見ると、こんな狭い国を縦貫する街道が二本、それも海近くに並んで二本というのは奇異な感じを受ける。これについてよくよく聞いてみると古いのは熊野街道（小栗街道）で、紀州街道は徳川時代、御三家の紀伊大納言徳川家が和歌山に城を構えてから本格的に整備されたのであるらしい。京・大阪と和歌山を繋ぐ道が海側に一本追加されたのである。

海路は開けなかった

街道は一本追加されたけれども海路は開けなかった。この場合、海路というのは人間用の船のことである。貨物便は別の話となる。

京都・大坂間の船便は早くから開けて淀川を登り下りする乗合船が繁盛した。瀬戸内海を大坂から西に行く便も、徳川時代のうちに次第に整備されて、遠距離急行とか近距離各駅停車ならぬ各港寄港とか、目的に合わせて選べるようになっていた。しかし泉州灘を大坂から加太を経て和歌山というような乗合便は遂に出来なかった。貨物は別として人々は陸路を取り続けたのである。

紀州街道という縦貫道を海側に更に一本、あとから追加できたということは、古くからある熊野街道が海のすぐそばではなくて少し山寄りだったということである。これも他国者である私から見るとやや奇異に感じられる。古い道が海岸沿いであってもおかしくないと思うのである。これは唐突だが、新キャンパスのある和泉市が海に面していないということと関連して来る。

和泉市

和泉市の地図を見て、真っ先に感じたのは海が無いということだった。和泉市が国名を名乗っているのは国府跡を抱えているからだ、和泉の国府は海岸線ではなく少し内陸に入ったところあった。JR和泉府中の東南、いま泉井上神社のあるところで泉が湧きだして国名のもととなったという。

泉井上神社は小栗街道に沿っており、そこにあったという国衙も、小栗街道が紀州街道よりも山寄りであった分だけ内陸部であったわけだ。和泉国府は海に面しておらず、それを直接に引継いだ現和泉市も海に面していない。

海に沿って長く延びている小さい国の、その国号を名乗っている都市が海に面していないのは、私のような他所者にはいささか不自然に感じられる。その違和感を無理になだめるために、旧国衙跡だといわれる神社が小栗街道に沿っているという、理屈にもならないただ見ただけの事実を持出してみた。

なお和泉の国号について、水が乏しく水を渴望したところからついた名前だという説明を御当地の方々から繰返し伺ったけれども、これはどうも得心いたしかねる。乏しいのは事実かもしれないが、国名の由来としてはやはり泉が湧き出した喜びというのでなければなるまい。乏しいところに湧き出した喜び、湧き出たにも拘らずなお乏しいというように、乏しさはついてまわるのかもしれない。

五社総社

泉井上神社のところにあったという国衙に隣

接して、和泉国五社の総社がつくられた。五社とは第一大鳥社、第二穴師社、第三聖社（信太社）、第四積川社、第五日根社。和泉の総社はこの五社の祭神を祀り、祭には五社の神輿が集まったとのことである。無理なく集まれる範囲だった。中世の五社祭は8月15日で、集まった神輿は列を作って総社から「館の山」に渡御したのだそうだ。館の山は泉井上神社から小栗街道を隔てて東南二百メートル余のところであって今は小さい公園になっているけれども、「山」という感じではない。

五社のうち、今回の「調査」では大鳥社と聖社と日根社とを見た。大鳥社は堺市域にあって良く知られている。和泉市域内の聖社については後で触れる。泉佐野市域内の日根社は、隣の慈眼院に松浦木遊無量図書館長主導で案内していただいたので、そのついでに見た。慈眼院は国宝の多宝塔で有名だが、実は神仏分離以前の日根社の神宮寺である。和泉五社のうち神宮寺がきちんと残っているのは、ここだけだという話であった。ただし今は日根社と慈眼院は垣根に隔てられて、直接の交流は乏しいと見受けられた。

日根社の横を榎井川が流れていて「大井関」という表示がある。小藤政子講師が「関」というからには、どこかで川がせきとめられているに違いないと、ひどくこだわって走り回って調べていらしたが、どうも判然としないようだった。

信太の森

五社の第二聖神社は信太の森の真ん中にある。いや、あったというべきか。私は個人的に、前記総合講座「泉州の今昔」を始める下準備として移転の前年、94年の3月に聖神社に行ってみた。講座で和泉国を取上げるからには、何はさておいても信太の森と聖神社は見て置かなければというのが、他所者の私の感覚であった。

JR北信太で降りて先に葛葉稲荷神社と旧府神社とを見て、熊野街道の聖神社の大鳥居のあるところから登って行ったのだが、行けども行けども信太の森らしきものは見当たらない。坂

道の左はコンクリートの大団地である。その団地に沿って進むと行く手にも団地が現われて団地の中の十字路という感じのところ立ってしまった。森は無い。団地から出てきた人に尋ねると、右手の小さい林が信太の森で、その中に聖神社があるという。

この小さな林は道を登ってくる時に右手に見えていたのだけれども、これが信太の森だとは思ってもいなかった。どこかに鬱蒼と茂った大森林があって私の見当違いで辿りつけないのだと不安になっていたのである。このちっぽけな林が信太の森だと言われたときの驚きは、我が生涯の驚きを数えて5本の指とまでは行かなくても10本の指を折る中には入るのではないかと思う。古典に頻出して名高いあの信太の森は破壊しつくされたのである。

95年度末すなわち96年3月のプロジェクト調査のときは、私個人は既に歩いて知っているところであり、しかも今回は松原右樹講師という屈強の案内者を得てタクシーを連ねて行ったので、2年前のような不安や驚きはなかったけれども、神社のことにお詳しい松原氏の解説を聞きながら、こんな酷いことにしてという怒りを新たにした。神社が森の破壊に加担しているらしい。前記十字路の下に見えている汚い水溜まりが鏡池だというのも前に確認して驚いたのだが、今回の説明で神社のいい加減な措置で所有権に問題があり保存の手を差し伸べにくくなっているとの話を聞いて絶望が深まった。森も池も本当に無残なことになっているのである。

泉州暦

聖神社との関連で舞村（舞町）というのが、今回獲得した新知識であった。「聖神」は「日知り神」で暦の神だという。舞村は土御門家の支配下であって聖神社の祭礼で舞を奉納する大夫が家業として暦を作り、徳川時代には頒暦にたずさわったというのである。舞町（旧舞村）は現和泉市の北北東の端に位置して、高石市に囲まれた感じの小さい一画である。舞村で作られた暦の版木がいまも舞町に伝えられていると伺って、プロジェクトの事実上の創始者である

松永俊男さんが泉州曆（岸和田曆とも言うらしい）の研究を志すと言明なさった。

松永さんの名前を出したついでに、彼がいま力を入れている「泉州学センター」構想について一言。こんど回ってみて感じたことだが、個人や神社などで、こちらが強くお願いすれば所蔵の古文書や統合した末社の御神体的なものなど、遺産を預らせて貰えそうなところは少なくない。ものによっては寄贈願えそうである。きちんと収集すれば泉州文化の立派なコレクションが出来上がり、研究用の資料としても多面的な威力を発揮するだろう。しかし大学の現状では、古文書の類を預らせて下さいとは、とても言い出せない。管理できないことが明瞭だからである。

泉南市・貝塚市というような行政体単位ではそれぞれ特色ある文化財対策や文化政策が執られているようだが、その網からこぼれているものもまた多い。それに加えて「泉州」というような単位での対策は、どこも担当していないのではないかと感じられた。桃山学院大学がそれに携わるだけの力をつければ、泉州と大学と、双方にとって意味が大きいことは間違いない。

院号

95年度末に行なったプロジェクトの泉州調査は、結果として熊野街道を和歌山との境まで通して観察することが中心となった。岸和田市内について同市居住の小藤政子講師や岸和田出身の松浦木遊無量図書館主にお世話になった外は、摂津との境から紀州との境まで一貫して松原右樹氏の懇切丁寧なご案内をいただいた。松原氏が連日配付して下さった大量のコピーはプロジェクト資料として大切に保存する。

ご案内の本筋とは別に、見て歩いた私が個人的に気にしたのは、泉州の寺々では「院号」が目立つということである。金涼山真教院願泉寺、珍泉山乗珍院元成寺、臥龍山隆池院久米田寺、護持山朝光院天性寺（蛸地蔵）というように山号と寺号の間に院号が特記されている寺が多い。

私は寺院のことは不案内だけれども、例えば長年住んでいる京都では、こういう表記を見た

記憶がない。寺々の正面に示されているのは黄檗山万福寺、延命山福蔵寺のように山号と寺号だけである。院がつくのは別系統の寺である。

京都で院号で知られているのは、知恩院とか聖護院のような特別の大寺を除くと、大徳寺の大仙院とか南禅寺の金地院、また天龍寺の鹿王院や妙心寺の退蔵院というように、たいていは大本山の塔頭である。院号だけで知られ、山号・寺号を伴わない。

塔頭でない独立寺院の場合は、こんど気になって初めて調べただけけれども、実は山号と寺号を持っているものが多い。例えば内藤湖南や河上肇の墓があることで知られる法然院は山号は善気山で寺号は万無寺であるらしい。しかし法然院だけで通っていて山号や寺号を使うことは極めて稀である。

浄土宗大本山の知恩院のことも、実は今回のことがあって初めて調べた。華頂山という山号と大谷寺という寺号を持っているらしい。しかし、こうやってわざわざ調べないと分からないぐらいで、世間には知恩院という院号だけで通っているのである。

繰り返しになるが、京都で普通に見られるのは「山号・寺号」か、「院号だけ」かなのである。これに対してこんど泉州で気になったのは、先に例を挙げておいたように「山号・院号・寺号」と三つ並べて表示している寺が多いということである。別の言いかたをすれば、寺号で知られているのに、山号だけでなく院号も表示されているのである。

泉州の寺々を見慣れた人には一向に気にならないことらしいのだが、私は気になってしかたがなかった。泉州の特色を識別するために密かに用意している解析用眼鏡の一つに加えようかと考えているのだが、これは空振りに終るかもしれない。空振りに終るかもしれないけれども、しかし95年度末にはプロジェクトチーフがこの程度のことを考えていたという嘲笑の対象としては恰好かもしれないと思い、恥をしのんで書出してみたわけである。

なお京都の場合の先ほどの「院号だけ」という言い方は、話を単純にするための断定が過剰

で、院号だけで知られてもその寺院の正面に「山号・院号」を表示する独立寺院があることを補足して置く。

三国山遍照光院向泉寺

方違神社が本当の三国ヶ丘だということは先に書いた。境内に三国ヶ丘という碑が立っている。その方違神社で同行していた大学院の伊藤健一君が石燈籠に「向泉寺」と刻んであると指摘して騒ぎだした。彼は修士論文に堺県の神仏分離のことを書いて、開口神社との関連で今は無い向泉寺のことを気にしていたのである。方違神社には向泉寺と刻んだ石燈籠が幾つもあった。他を圧している。神仏分離以前には大きな力を持つ神宮寺であったに違いない。

石燈籠に刻まれた「向泉寺」に続いて「三国山」という字が目につきだした。三国ヶ丘という碑に抵抗を感じるぐらいの平地の真ん中だから「山」は更に場違いなわけで、これは向泉寺の山号だろうというのが、その場での私の思いつきであった。

自慢たらしく聞えるかもしれないし、反面これまでの自分の無知を暴露するような話でもあるわけだが、三国山が向泉寺の山号だろうという私の見当は間違っていなかった。伊藤君が探しだした『行基菩薩と向泉寺』という昨年（19

95）刊行の非売品の本によると、向泉寺は摂津・河内・和泉に跨がる方八町の大寺で、三国山と号した。方八町を信じれば、いまの方違神社は旧向泉寺の寺域内にすっぽりと入ってしまう。また、この三国山向泉寺の院号が遍照光院だという。

現存しない寺であるから、遍照光院という院号がどの程度の比重をもって使われ表示されていたのかは分らない。確かなのは史蹟関伽井の表示が「三国山遍照光院向泉寺関伽井跡」と「山号・院号・寺号」表記タイプになっていること、縁起のタイトルも「泉州大鳥郡三国山遍照光院向泉寺縁起」とやはり中に院号を挟んでいることぐらいである。真言宗臭いなというのは、この院号を見たときの咄嗟の感覚的反應だけれども、行基開創と伝えられる向泉寺が、いつどのような経緯で真言宗に組込まれたのか、それは明らかでない。

分らないことだらけだけれども、「三国山遍照光院向泉寺」のおかげで、院号にこだわって見ようという思いつきが全くの空振りではないかもしれないという微かな手応えを得た。その感触を披露しておいて、勝手ながらこの主観的レポートを、時間に追われるまま急ぎ慌ただしく終えることにする。